

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12921

研究課題名（和文）シェリング及び現象学におけるその継承と展開に関する研究

研究課題名（英文）Research of Schelling's philosophy and its inheritances and developments in the phenomenology

研究代表者

小田切 建太郎（OTAGIRI, Kentaro）

立命館大学・文学部・授業担当講師

研究者番号：40802278

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主にハイデガー現象学とシェリング哲学における自然や自由の問題の究明から出発した。その過程で、キャロル・ギリガンに代表されるケアの倫理などを經由することで、現代における人間的生の抑圧状況やその自由の可能性に関する解明も行うことになった。概略以上のような研究のもとで、学会発表、論文、著書、翻訳書の公刊という成果を得ることができた。またこれらの成果は、古典的哲学・現象学・倫理学・精神分析などを横断した今後の研究の下敷きとなるものであり、その意味でも有意義な成果であると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【学術的意義】本研究は、主にハイデガー現象学とシェリング哲学における自然や自由の問題の究明から出発し、これに関する解明をおこなった。この学術的意義として、先行研究では明確にされて来なかった点からハイデガーとシェリングの思想内容の関係を明らかにしたことがある。【社会的意義】本研究は、上記の研究過程で、キャロル・ギリガンに代表されるケアの倫理などを經由することで、現代の人間的生の抑圧状況やその自由の可能性に関する解明もおこなった。これは、現代に生きるひきこもりや不登校の当事者・経験者、社会福祉や教育に携わる人々の置かれた状況を相対化し明確化する観点を提供するものとして社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study started primarily from an investigation of the problems of nature and freedom in Heidegger's phenomenology and Schelling's philosophy. In the process, through the care ethic represented by Carol Gilligan and others, I have also been able to elucidate the contemporary situation of oppression of human life and the possibilities of its freedom. In summary, the above research has resulted in conference presentations, articles, a book, and a translation. These results are also significant in the sense that they will serve as a foundation for future research that will cross classical philosophy, phenomenology, ethics, psychoanalysis, and other fields.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：自由 自然 ケア 現象学 ひきこもり

## 1. 研究開始当初の背景

### 背景(1)シェリング哲学と「思惟以前的存在」をめぐる研究状況

現在日本ではシェリング著作集(燈影社)の出版も続いており、シェリング哲学の研究は主にドイツ観念論の専門家によって行われていた。しかしながら、カントやヘーゲルの研究に比すればまだ研究者の数も少なく、その解明はまだ進んでいない点が多く残されていた。こうした点のひとつとして「思惟以前的存在」があった。つまり、問題点として、シェリングにおける「思惟以前的存在」の意味がシェリングの専門研究においても十分に解明されないままに留まっていた。

### 背景(2)現象学と「思惟以前的存在」

これに加えて、現象学との関連における「思惟以前的存在」の問題があった。この問題に関わる主な現象学哲学者の名前を挙げれば、メルロ=ポンティ、マルク・リシール、(リシールの論を受けた)ラスロ・テンゲイ、ハイデガーがいた。

メルロ=ポンティ：このなかで最も研究が進み、一般に知られているのはメルロ=ポンティの解釈がある。しかし問題としてこれに関する主なテキストが、彼の死によって未完のままに終わった前掲書(1964)である文献的限界があった。このため先行研究はあったが、メルロ=ポンティの断片的な論及に対して具体的・詳細な肉付けが難しいという難点があった。この文献的問題を根本的に解決することはできない。こうした状況に対して本研究は、上述のシェリングに関する研究および後述の他の現象学者の議論の解明により、「思惟以前的存在」の現象学運動における解釈史のうちメルロ=ポンティを位置づけ、現象学・哲学史的コンテクストにとってそれが有する意味・意義を明らかにしようとした。

マルク・リシール(および、ラスロ・テンゲイ)：リシールのシェリング解釈(M.Richir, *L'Experience du penser - phenomenologie, philosophie, mythologie* 1996, *Inconscient, nature et mythologie chez Schelling* 2011, *Hyperbole dans la philosophie positive de Schelling : Approche phénoménologique* 2012, *Sauvagerie et utopie métaphysique* 1988, *Qu'est-ce qu'un Dieu ? Mythologie et question de la pensée* 1994)については、日本でも欧米でも詳細は知られていない。これに関して、シェリングおよびハイデガーの『自由論』解釈、メルロ=ポンティにおける「思惟以前的存在」の意味を参照しながら、明らかにすることができると考えた。またリシールの論を受けたテンゲイの「思惟以前的存在」についての論及(L.Tengelyi, *Welt und Unendlichkeit. Zum Problem phänomenologischer Metaphysik* 2015)も同じ連関のなかで解明する必要があった。

ハイデガー：ハイデガーとシェリングの関連に対しては、従来の先行研究では、以下の2つの焦点があった。1つ目の焦点は『存在と時間』(1927)以前の最初期と呼ばれる時期の「生の事実性(Faktizität des Lebens)」の哲学へのシェリングからの影響であった。この議論の主要な動機は、『存在と時間』以前にハイデガーのシェリング演習に出席したという晩年のガダマーの証言にある。しかし近年の検証ではこれはガダマーの記憶違いであるという一定程度信憑性が高い見解が提出され、議論の見直しが迫られている(Cf. L. Hühn und J. Jantzen (Hg.), *Heideggers Schelling-Seminar* 2010)。2つ目の焦点は、1936年に行われたハイデガーによるシェリングの(「思惟以前的存在」概念登場以前の)『*Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände*』(=『自由論』1809)に関する講義である。これに関してはこれまで多くの研究が提出され、なかでもハイデガーによる解釈において『自由論』の「頂点」とされる「無底(Ungrund)」の軽視・無視が問題視され、「無底」とその背後にあるヤコブ・ベームのドイツ神秘主義とハイデガーの関係を究明しようという試みがなされてきたが、これまで十分に説得的かつ明確な議論をいまだ見られなかった(大橋良介「シェリングの無底と体系 ハイデッガーの解釈との対決」1999)。これに加えて本研究は新たに3つ目の焦点として「思惟以前的存在」の問題を提出する。『自由論』の議論の陰に隠れてハイデガーには「思惟以前的存在」はその記述自体がハイデガーの主要文献に見当たらず問題として認識されてこなかった。対して申請者は綿密な文献調査を通じこの記述を少なからず発見した。これによりハイデガーにおけるシェリングの「思惟以前的存在」の受容・解釈とその意味の解明という課題が設定可能となった。この課題の遂行により、ほかの現象学者におけるシェリング解釈との比較検討が可能となり、現象学とシェリングという大きなコンテクストに位置づけ、その意味・意義を測り、そこからハイデガーの最初期思想との事象的連関及び『自由論』解釈に新たな光をあてることが期待できた。

## 2. 研究の目的

「大枠としての目的」：本研究の目的は、シェリングにおける「思惟以前的存在」の意味を明らかにするとともに、現象学者たちによるこれに継承発展としての独自の解釈を開明し、シェリング哲学と現象学双方の可能性を明確化することに存した。「詳細目的1」：個々の現象学者たち

を「思惟以前的存在」という共通の視座から見ることで、これに関する現象学的解釈史を構築しようとした。「詳細目的 2」:「思惟以前的存在」の問題はより詳細には、現象学における「世界(Welt)」「生(Leben)」「身体」「行為」「事実性(Faktizität)」「偶然性(Zufall)」「ポテンツ/可能性」などの問題に直結する。本研究はこれらの重要概念を新たに解明する。「詳細目的 3」本研究の解明は、ハイデガーやメルロ=ポンティに顕著に見られるように、近代的主観・客観の問題構成に対するラディカルな批判と共にある。それゆえ本研究の解明はシェリングにおける「思惟以前的存在」の意味を超えて、さらにより現代の私たちの経験・生に即した主観-客観の区別以前の根源的次元、能動態と受動態の分離・対立以前の根源的動態としての「中動態(Medium)」の解明につながる予定であった。「波及的目的」:こうした存在/生の根源的次元/動態としての中動態/偶然性の解明は、より広く人間・自然・言語・世界・文化を考える際の新たな視界を開き、現代の諸課題のために哲学の側から貢献することが期待された。

本研究の当初の目的は、上記の研究状況に対して、哲学的・哲学史解明を通して寄与することにあった。ただ、研究途中において世界的な新型コロナウイルスの流行のため、当初の計画通りの研究遂行が困難になったこと、また、研究過程においてケアの倫理関係の研究・観点を取り入れたことで、上記のような当初の目的とともに、古典的(現代)哲学とケアの倫理や社会(哲学)など現代的課題に向かい合う諸学問を横断することで、現代の人間の生が置かれた状況を哲学的・倫理的に解明することも目的として設定することになった。

### 3. 研究の方法

以上の研究内容と研究範囲に関する研究を、文献資料の原典読解が基本とする研究方法によって遂行する予定であった。(I)「1次文献の読解」:シェリングおよびほかの現象学者の原典を読解・解釈する。(II)「2次文献の読解」:関連する先行研究の文献を渉猟し、これまでの研究の不足分や不適切な点を洗い出す。(III)「比較考察」:1次および2次文献の内容を比較考量する。(IV)「現象学的追遂行と再構成」:問題事象を過去の学説としてではなく、事象そのものを目指して遂行し、現代の私たち自身の生きた事柄/事象として再構成する。

本研究が当初想定していたのは上記のような方法であったが、同時に、途中から不登校やひきこもりなどの当事者・経験者の語りの参照も研究方法として取り入れることになった。

### 4. 研究成果

本研究は、その成果として、主にハイデガー現象学とシェリング哲学における自然や自由の問題の究明をおこなった(学会発表、論文、著書など)。その過程で、キャロル・ギリガンに代表されるケアの倫理などを経由することで、現代における人間的生の抑圧状況やその自由の可能性に関する解明も行うことになった(学会発表、論文、著書、翻訳書など)。概略以上のような研究のもとで、市民講座のような形での成果発表の機会も得ることができた。また、これらの成果は、古典的哲学・現象学・倫理学・精神分析などを横断した今後の研究の下敷きとなるものであり、その意味でも有意義な成果であると言える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>小田切建太郎                              | 4. 巻<br>5             |
| 2. 論文標題<br>原事実性と疎外 ひきこもり経験の現象学的解釈             | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>現象学と社会科学                            | 6. 最初と最後の頁<br>107-122 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                 | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小田切建太郎                              | 4. 巻<br>30            |
| 2. 論文標題<br>自由をめぐる初期ハイデガーにとってのシェリングの意味         | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>シェリング年報                             | 6. 最初と最後の頁<br>未詳      |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                 | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小田切建太郎                              | 4. 巻<br>52            |
| 2. 論文標題<br>疎外と抵抗ー関係性から見たひきこもり                 | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>倫理学研究                               | 6. 最初と最後の頁<br>156-167 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                 | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小田切建太郎                              | 4. 巻<br>120           |
| 2. 論文標題<br>「ハイデガーとヘルダーリンの「宗教について」（「哲学書簡の断片」）」 | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>『立命館大学人文科学研究所紀要』                    | 6. 最初と最後の頁<br>61-90   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-             |

|  |                  |
|--|------------------|
| 1. 著者名<br>小田切建太郎                       | 4. 巻<br>665      |
| 2. 論文標題<br>「動(詞)的観点から見た事実性の射程と限界」      | 5. 発行年<br>2020年  |
| 3. 雑誌名<br>『立命館文學』                      | 6. 最初と最後の頁<br>未詳 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無       |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-        |

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎             |
| 2. 発表標題<br>居ることあるいは居場所の自由のために |
| 3. 学会等名<br>日本現象学・社会科学会        |
| 4. 発表年<br>2022年               |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎                   |
| 2. 発表標題<br>「ひきこもり」を哲学、する？ 現象学×当事者研究 |
| 3. 学会等名<br>立命館大学 ライスボールセミナー         |
| 4. 発表年<br>2020年                     |

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎           |
| 2. 発表標題<br>「ひきこもり」について語ってみる |
| 3. 学会等名<br>京都アカデミア 京アカゼミ    |
| 4. 発表年<br>2021年             |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Kentaro OTAGIRI   |
| 2. 発表標題<br>Intelligible Tat und Faktizitaet: Zum frueheren Heidegger und Schelling |
| 3. 学会等名<br>NORTH AMERICAN SCHELLING SOCIETY (NASS7) (国際学会)                         |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|                                |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎              |
| 2. 発表標題<br>生きづらさの空間 ある語りにもとづいて |
| 3. 学会等名<br>関西倫理学会              |
| 4. 発表年<br>2022年                |

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎           |
| 2. 発表標題<br>ハイデガーにとってシェリングとは |
| 3. 学会等名<br>日本シェリング協会        |
| 4. 発表年<br>2021年             |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Kentaro OTAGIRI   |
| 2. 発表標題<br>An Attempt to Make Sense of Hikikomori  |
| 3. 学会等名<br>The 59th Meeting of the Society for Phenomenology and Existential Philosophy (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|                                 |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎               |
| 2. 発表標題<br>自由の観点から見たひきこもりに関する試論 |
| 3. 学会等名<br>関西倫理学会               |
| 4. 発表年<br>2021年                 |

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎             |
| 2. 発表標題<br>ひきこもりに関する現象学的解釈の試み |
| 3. 学会等名<br>日本現象学・社会科学会        |
| 4. 発表年<br>2021年               |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>OTAGIRI Kentaro   |
| 2. 発表標題<br>The more tender and more infinite relationship: On the mediation in Heidegger |
| 3. 学会等名<br>17th annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology (国際学会)         |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>小田切建太郎                            |
| 2. 発表標題<br>「ハイデガーと他動詞性　ヘーゲル、シェリングとの近さと遠さから　」 |
| 3. 学会等名<br>日本哲学会                             |
| 4. 発表年<br>2019年                              |

〔図書〕 計3件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>小田切建太郎（分担執筆）                  | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>晃洋書房                          | 5. 総ページ数<br>310 |
| 3. 書名<br>狂気な倫理 「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定 |                 |

|                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>小田切建太郎（分担執筆） | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>昭和堂          | 5. 総ページ数<br>642 |
| 3. 書名<br>『ハイデガー事典』     |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>キャロル・ギリガン（小田切建太郎 = 共訳） | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>晃洋書房                   | 5. 総ページ数<br>-   |
| 3. 書名<br>抵抗への参加ーフェミニストのケアの倫理（仮題） |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|